

武者小路實篤選集

第四卷

武者小路実篤選集
第四卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 4 卷

昭和39年 12月15日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者小路実篤

発行者 真鍋謙二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 河上製本工場

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版 株式 青銅社

電話 二六〇局 八七六五番

振替 東京 三四、八九二番

Printed in Japan ©

序

この小説は自分の今までかいたものの中では一番大きなものと思う。

「出鱈目」と題して白樺に二年にわたってのせたものだ。題を「第三の隠者の運命」とかえたのは別に意味はない。始めもつと出鱈目なものをかくつもりだったが、いつのまにか、道が出来て、出鱈目ではなくなった。

自分はここでは人間が、どういう風に生活するのが本当であるかということと、人間はどういう風につくられているかということを見たかった。

しかしそのために作品の芸術的生命を高くしても低くしたくなかった。自分は芸術家としての趣味、良心、生命観を今までよりも一層立体的に明らかに表現出来たように思う。

あとは事実にかませるより仕方がない。読者はここによるこびを見出してくれれば、自分の望みは満たされるのである。

この本は自分の尊敬する新しき村の会員諸兄姉に捧げたく思っている。新しき村の仕事を始めることが出来なかったらこの作は生まれなかったであろう。

この作は人間が正しき社会に住むことが出来れば出来るほど、この内に同感を見出してもらえらることを目標にした。

この目標にどこまで近づけたかは未来の人に任せるより仕方がない。

自分はこの作を門出の作だと思っている。自分がかきたいことを随分かきもらしている。他日、自分のかきたいことを全部かいてみたかと思っている。しかしそれは自分の力ではない。ただ今の健康で五十ぐらいまで生きられたら、いく分かその望みが果たせられると思う。しかしせめて六十三ぐらいまでは生きたい。それ以上生きられれば（勿論頭をこわせばそれまでだが）自分は自分のファウストのようなものがかきたい。

自分はあらゆる人生に生きる道を与えたい。不可能にしろ。（二二、二二、一〇）

武者小路実篤

武者小路實篤選集・第四卷

目次

第三の隠者の運命

7

愛慾

295

人間万歳

377

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

第三の隠者の運命

森の中に三人の隠者が住んでいて清浄な生活をしていた。

或る日、第一の隠者が一人で森を歩いていて、天氣が非常によくって、隠者もいつもよりなお心が清く、気持ちがよかった。小鳥の飛んでいるのや鳴くのを聞いたり、可愛い草花を見たりして一人よこんで歩いていた。彼はますます気持ちがよくなって、すべてのものに親しみを感じ愛したい気がした。

この時一匹の鹿が出て隠者を見て逃げて行った。隠者は何を見ても、神に感謝することが一つの癖になっていた。この自然の美しさを見ても、神は讚美すべきものだと思った。

そして彼はいつもに近く深く入っていった。するとどこからともなく、美しい女の声が聞こえた。二三人の女が話をしているらしかった。いつもなら隠者は女の音がすると逃げるのが例なのだが、この日に限ってふとどんな女だろうと見たくなった。話し声は木の繁みから聞こえた。彼はその方に歩いて行って木のかげから声の方を見た。

するとそこに三人の女が水浴をしていた。誰も見ている人が居ないと安心して切って居るらしく三人とも気楽に裸のまま、岸へはいあがったり、水の中を泳ぎまわったりしていた。その池の水は実に美しかった。わきに泉がわき出ている、それがたまに自ずから美しい池をつくり、またそれが美しい小川になって流れ出ている。池の

わきには名の知れない美しい花が咲いていて、日光は森のあいだを通過して、女の身体の上に光を投げあたえていた。彼はそれを見ると、見てはならないものを見たと思った。それで彼はおどろいて逃げて帰ろうとした。しかし彼は見た。

女は彼が居ることはまるで気がつかないらしかった。三人の美しい女はあらゆる姿を彼に見せた。それは彼にはあまりに美しかった。女達は暫くして身体をふいて、どこかへ帰って行った。隠者は夢見たような気持ちになつてぼんやりしてしまつた。彼は大きな罪を犯したような気がした。しかし一方、彼は今まで自分が女について考えていた考えの不足を知らないわけにはゆかなかつた。

女は穢れたものの、悪魔のつくつたものの、男を墮落させるものの、彼はそんな気がしていたが、女の美しさを見るとそんな気はしなかつた。女の身体こそ、神の一番の傑作だ。彼はそう思わないのは、不正直な気がした。しかし彼はもう以前のような、心の平静は得られなかつた。彼は一方見たことをよろこび、感謝したい気がしたが、他方、見なければよかつたという氣もした。

彼は帰つてからも二人には何もしゃべらなかつた。そして二人が何を話しかけてもうるさかつた。

彼の考えはもうまとまらなかつた。そしてただ見たものの記憶がよみがえるばかりだつた。

翌日も彼はそこにゆかないわけにはゆかなかつた。そして彼はそこでまた水浴する三人の女を見た。

彼はもうその時が来ると、じつとしてはいられなくなつた。そして毎日、そこにゆかないわけにはゆかなかつた。彼はいつのまにか、女を讚美する男になつていた。そしてもう二人にその考えをかくすのがつらくなつた。

他の二人の隠者は今までのように、平静に、女のこの世に存在することを忘れてるように生活しているのが、彼には羨ましい氣もしたが、同時に馬鹿にも見えた。

或る時彼は第二の隠者に言った。

「世の中で一番美しいものはなんだ」

「何かな、青空かな、星かな、それとも花かな、それ等のものを、おつくりになったものだな」

「君はそれ等の美を見るためなら生命さえ惜しくないと思うかい」

第一の隠者の言葉は、言葉さえ以前のおちつきはなかった。

「そんなに執着するものはない。ないことはありがたいことだ」

「私もそう思っていたよ。本当の美というものを知らないうちはね」

「君はそんな美を見たのか」

「見た」

「どこで？」

「森のなかで」

「花か」

「いいや」

「鳥か」

「いいや」

「獣か」

「いいや」

「植物か」

「いいや」

「無生物か」

「いいや」

「人間か」

「そうだ」

「そんな偉い方がこの森にいらっしゃるのか」

「男ではない」

「男ではない？」

「女さ！」

「女？」

「君は女というものをまだ本当に見たことはあるまい」

「ここに来る前には見た」

「しかしそれは完全な女ではないだろう。神のつくったままの女というものを見たことはないだろう」

「君は墮落したのかい」

「よろこんで、墮落でもするね、あの美しさを見たら。しかし墮落するとは限らない。俺はその美を見てから、本当に生き生きした感じがして働けるようになった。今までのような枯木のような生活ではなくって、もっと生き生きした生活をする事が出来るようになった。世界が俺には新しくなって何を見ても面白くなって来た」

「それは悪魔につかれたというものだ」

「何とでも言うがいい。僕の見たものを君が見たら、同じく驚くにちがいない。そしてそのためになら地獄におちてもいいと思うだろう。まして地獄におちなかったら、それは恐るべきものじゃない」

「しかし君は真面目な考えがなくなつて来たろう」

「そんなことはない。僕は今までよりなお真面目になれたつもりだ、僕は今までよりも働かないかね。僕の腕は今までより太くつて力づよくなつたろう。僕の顔色は今までより生き生きして来たろう。僕は女を恐れるというような消極的な考えは嫌いになった。僕は女の美を讃美する。あんなに美しくつくられたものを、讃美しないものは神をけがすものだと思う」

そういつて第一の隠者は、自分の見たことをくわしく話した。第二の隠者も、いつのまにか、第一の隠者と同じ考えを持つようになった。第三の隠者はいつのまにか、どこかへ行つてしまつた。

二人はその後、その女と知り合いになった。二人は女を歓迎した。そして二人はその後女の家泊まることが多くなつた。

二人は第三の隠者を探し出して、第三の女の相手になるようにすすめることをたのまれたが、第三の隠者のゆくへはわからなかつた。

二

何年か過ぎた。

第一の隠者は、女と一緒に住んで三人の子供の父になつた。そして吞氣にくらしていた。しかしもう以前のよきに女を讃美する気はなくなつた。毎日、畑を耕したり、木を切つたりして、暇の時は、妻や子供を相手にして

呑気にくらししていた。彼は別に今の生活には後悔はしなかった。そしてそこに平和なよろこびさえ見出した。女はすっかり女房になりすまして、だんだん身体も太って来、器量もだんだんわるくなっていった。しかしそれを別に気にもしなかった。

しかし第二の隠者は幸福にはなれなかった。彼は結婚して二三年たつと、第三の女といつのまにか仲がよくなつた。それでたえず夫婦喧嘩があつた。姉妹の間に争いがあつた。彼はその間にたつて困ることが多かつた。彼は両方を同じく愛していたのだが、女達は自分の方をより多く愛してもらいたがつた。そして相手の女が死ぬことをお互いにのぞむようになった。二人の女には一人ずつの男の子が生まれた。これがなお競争のもとになった。二人は子供を抱きながら、往来で出逢うことがあつた。相手の子が、自分の子より醜いことをのぞんだ。二人は憎悪の目をもって見合つた。第三の女は自分の罪を自覺していたのだが、男が自分を姉よりも愛していないということを知ってから、明らかに姉に悪意をもつた。

しかし二人は悪意を見せるのは自分の値打ちをさげることだと思つた。それで、逢うとつとめて話すようにした。しかしそれは自然ではなかつた。

第二の隠者は第一の隠者をたずねた。そしてよくこの苦しみを訴えた。しかし第一の隠者は、自分も第三の女に厚意を持っていたので、あまりそのことにいい気は持っていなかつた、然しそれをさとられるのがいやなので、いい加減にあしらっていた。二人の間も以上のように仲がよくなかつた。

三

ある日のことだつた。